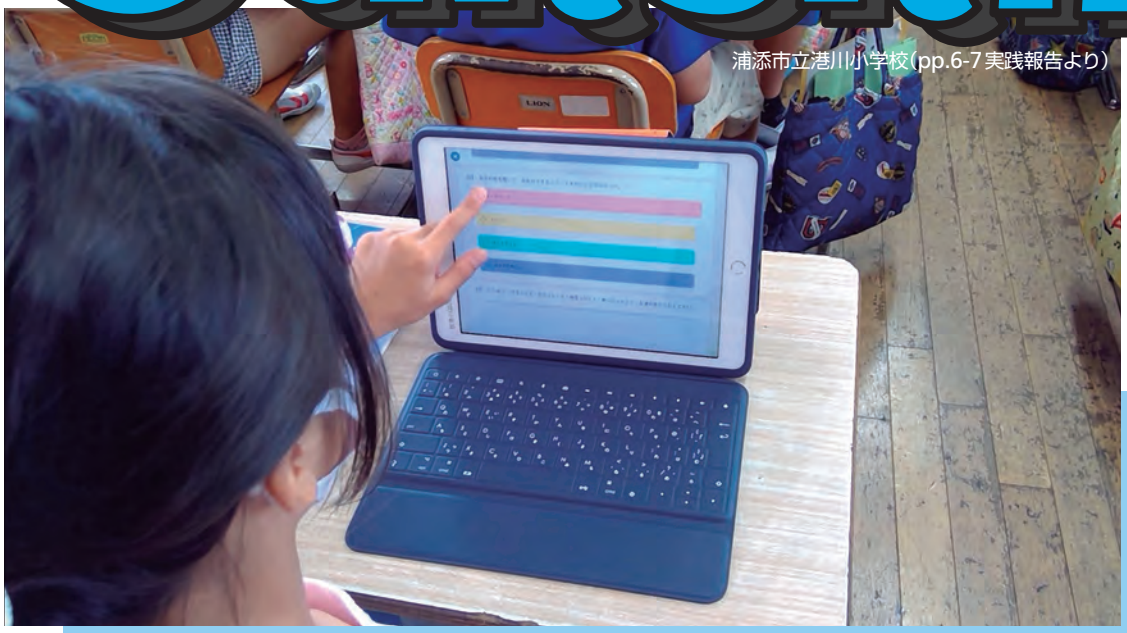
非売品

Junior Sunshine

小学校英語情報誌

2021
Vol.4-1



浦添市立港川小学校(pp.6-7実践報告より)

巻頭言

伝え合う小学校外国語

北海道教育大学教授 **萬谷 隆一**

新学習指導要領では，外国語を使いながらコミュニケーションをすること，さらにはコミュニケーションをすることで外国語の習得が進むことが重視されています。小学校では，中学校的な「読み書き」から入る指導・評価に偏るのではなく，本来，「聞くこと」「話すこと」の指導と評価の努力をまず優先すべきです。

まずは，伝えたいと思える場面・活動設定が大切です。そのためには，児童に合った身近な題材で，児童が話したい場面をどう仕かけるか，味つけするかが問われます。さらには，どの子も話せるように，丁寧な基礎の指導と言語活動のくり返しが必要です。「ああ，あの表現で言えばいいんだ」「こう言おうかな」など，基礎的な習熟に基づいて表現がすぐに想起できる，工夫して伝えられる，という構図が大切です。そのうえでそうした日頃の音声のやり取りや発表などで，1人で堂々と英語を使う実践力や慣れが発揮できるような評価場面の設定が大切になってきます。「読み書き」の指導・評価も必要ですが，まずは音声での言語活動を指導・評価する取り組みを進めていただきたいと思います。

CONTENTS

巻頭言 …… 1
萬谷 隆一(北海道教育大学教授)
特集❶ 評価Q&A …… 2
大城 賢(琉球大学名誉教授)
特集❷ 実践報告 …… 6
神村 好志乃(沖縄県浦添市立港川小学校教諭)
Reading and Writing Step-by-Step …… 8
長谷川 アリソン(宮城教育大学特任教授)

開隆堂

評価Q&A

教えて！大城先生!!

琉球大学名誉教授
大城 賢 先生

平成29年改訂学習指導要領に対応し，学習評価は「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で行うことになりました。約1年半の実践を経てなお，現場の先生方から，評価に関するお悩みの声が聞かれます。そこで，今回は，新しい内容である「3観点」，「読むこと」，「書くこと」に焦点を絞り，先生方から寄せられた疑問について，大城賢先生にご回答いただきました。

Q1 「知識・技能」と「思考・判断・表現」の違いがよくわかりません。

「聞くこと」の領域を例に，「知識・技能」と「思考・判断・表現」の違いを考えてみましょう。

「知識」は英語の決まりや特徴を理解していることですから「思考・判断・表現」とは異なることがわかりやすいと思います。問題は「技能」と「思考・判断・表現」との違いです。「聞くこと」の**「技能」では，実際のコミュニケーションにおいて具体的な情報を聞き取ったり，短い話の概要を捉えたりする技能を身につけている**かどうかを評価します。一方**「思考・判断・表現」においては，コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて具体的な情報を聞き取ったり，短い話の概要を捉えたりしている**かどうかを評価します。

具体例を示しましょう。『Junior Sunshine 5』Lesson 3では，“What do you have ～？”や“I have～on～.”などの表現を用いて時間割をたずねたり答えたりする学習を行います。その単元の【Let’s Listen 3】において，さまざまな職業の人々が好きなことや好きな教科などを話している音声を聞いて，scienceやEnglishなどを聞き取っている様子から，「知識・技能」を見取ることができます。また，指導者とALTのティーム・ティーチングの場合，指導者がALTに「アメリカにはどのような教科がありますか？」とたずね，児童がALTの答えから具体的な教科名を聞き取っている様子からも「知識・技能」を評価することができます。

では，「アメリカの学校についてもっとよく知るためにALTの先生の話を聞いてみよう」はどの観点で評価すると考えますか。「アメリカの学校についてもっとよく知るために」という目的や場面，状況などに応じて，例えば日本の時間割と比較しながら「home economics がないこと」や「毎日，ほぼ同じ時間割であること」などを書いている場合，具体的な情報を自ら思考，判断し，聞き取っていることから，「思考・判断・表現」で評価することになります。

このことから，「知識・技能」，「思考・判断・表現」の指導と評価について，次の2つのポイントを導き出すことができると思います。

・「知識」を理解することだけに終わらせず，実際に活用しながら「知識」と「技能」を育成すること。
・育成を目指す資質・能力を明確にし，それにふさわしい活動を設定して指導し，評価すること。

Q2 「主体的に学習に取り組む態度」の評価は，児童が一生懸命に頑張っている様子を評価するのではないのでしょうか。

「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（以下，『参考資料』）では，「『主体的に学習に取り組む態度』の評価に際しては，単に継続的な行動や積極的な発言を行うなど，性格や行動面の傾向を評価するということではなく，各教科等の「主体的に学習に取り組む態度」に係る観点の趣旨に照らして，知識及び技能を習得したり，思考力，判断力，表現力等を身に付けたりするために，**自らの学習状況を把握し，学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら，学ぼうとしているかどうか**という意思的な側面を評価することが重要である。」（下線，太字は筆者による）と示しています。

したがって，単に「挙手の回数が多い」「大きな声で返事をしている」「たくさん書いている」といった様子のみでは，「主体的に学習に取り組む態度」の評価はできません。その頑張りが「知識及び技能」や「思考力，判断力，表現力等」を身につけるものとなっているかを見極める必要があります。

その見極めのポイントが，左の引用文において太字で示した部分です。ここには，児童が「知識及び技能」や「思考力，判断力，表現力等」を身につけるために粘り強く取り組む中で，自らの学習を振り返って成長や課題を見つけ（**メタ認知**），つまずきを解決したり新たな学び方を見つけたりして学習を調整しようとしているか（**自己調整能力**）の2つの側面について触れられています。頑張りが「知識及び技能」の習得や「思考力，判断力，表現力等」の向上につながっていない場合は，指導者は児童を個別に指導したり，自らの指導の改善を図ったりすることが大切です。

Q3 音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現の意味がわかっているかどうかを，どう見取ったらよいのですか。

「読むこと」の「思考・判断・表現」の評価は，目的や場面，状況などに応じて，音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を読んで意味がわかっている状況から見取ります。『Junior Sunshine 6』Lesson 5では，“I want to ～.”を用いて，見たいものや食べたいものなどをたずねたり答えたりして伝え合う活動や，児童が聞いたり話したりした文を読んだり書いたりする活動を行います。その単元の後半の「読むこと」の活動で，以下の英文を提示しました。内容は，ALTの母親からALTへのメールです。

> Hello Tom! How are you?
> I like Okinawa. I want to go to Okinawa.
> I want to visit fun places.
> I want to eat delicious food.
> I want to see you.
> Love, your Mom.

このメールを読んで，「ALTの母親に返事を書くために，沖縄のおすすめしたいものとその理由をワークシートに書こう」と課題を与えます。そして，例えば児童が「美ら海水族館をおすすめしたい。その理由はめずらしい生き物を見ることができて楽しいからです」と書いていれば，ALTの母親に喜んでもらうという目的に応じて，“I want to visit fun places.”を読んで意味がわかっている様子を見取ることができます。

大切なことは，児童に何のために読むのかを明確に示すことと，評価する前にはそれらの語句や表現に十分に慣れ親しませていること，言い換えれば，児童が十分に慣れ親しんだ語句や表現を用いた英文を示すことです。小学校では，児童が慣れ親しんでいない語句や表現を読ませることは求められていません。

Q4

「アルファベットの大文字，小文字を四線上に正しく書く」を，どこまで厳しく評価したらよいのか悩んでいます。

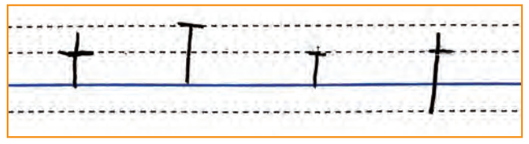
「書くこと」のアの目標について，「小学校学習指導要領解説　外国語活動・外国語編」では，「児童が何も見ることなく自分の力で活字体の大文字，小文字を書くことができるように指導する必要がある。」と示しています。また，「四線上に正しく書くことができるようにする。」ことも記されています。そのため，正確性をどこまで厳しく求めたらよいのかと悩まれているのだと思います。難しい質問ですが，その解決のヒントになることを書きたいと思います。

まず，「正しく書く」について，書き順の通りに書くことができているかを評価することが考えられます。しかし，**英語のアルファベット文字の場合，書き順は書きやすくなるための一例に過ぎず，決まりはありません。**このことから，書き順は評価の対象外であると判断できます。

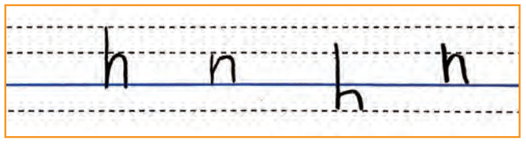
次に，「四線上に正しく書くこと」の意味はどうでしょうか。日本の小・中学校の外国語教育で使われている四線には，線の間隔が等しいものと，真ん中の2つの線の間隔がほかと比べて広くなっているものがあります。真ん中が広くなっている四線を使って大文字を書くと，例えばHの横線は上から2番目の線とは重ならず，少し下のほうに，高さを自分で判断して書くことになります。しかし，2番目の線に合わせて書いてもHと判別することができない訳ではありません。欧米の小学校では四線を使わずに文字の指導をしているところもあります。文字の書き順などを指導されたことがない人もいるようです。「四線上に書く」ということをどのように解釈するかが難しいところです。

日本には文字を丁寧に書くことをとても大切にする文化があり，「ひらがな」の指導では「4マス」が使われています。4マスの手本通りに書いていない文字でも判読できるのに，その書式が使われ続けているのは，例えば「い」の左と右の線がどのくらいカーブし，離れているか，それぞれがどのくらいの長さなのかなど，マス目が手がかりとなって文字の形や特徴を捉えやすいからではないでしょうか。それで「あ」の2画目は1角目の横線から上に出る」のように判別に影響を与えるところを丁寧に指導し，評価することができるのです。

英語の文字についても，tの上の線は横線よりも上に出ることや，nやhは縦の線の長さに注意することなどは，丁寧に指導することが大切です。4マスと同じように，四線上に文字を書く手がかりとして書くように指導し，その学習状況を評価することが求められていると考えることができるのではないでしょうか。「絵」を評価するのとは異なり，美しさや構図などから，個別の文字をa～cの評価基準を設けて評価することにはあまり意味がありません。英語の文字を書くことについては，進度や到達度の個人差が大きく，大人が考えるほど児童にとって容易ではないことから，**時間をかけて指導する必要があります。形成的評価を中心に行い，書くことができるようになった段階で文字の判別に関わるポイントを中心に評価**していくことが大切であると思います。



児童が書いた小文字tの例



児童が書いた小文字hの例

Q5

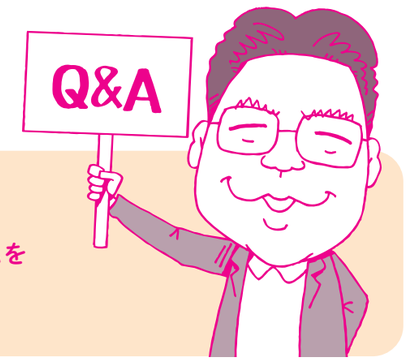
単語と単語の間を空けて書くことは「知識・技能」「思考・判断・表現」のどちらで評価するのですか。

『参考資料』では，「書くこと」の「知識・技能」「指導・判断・表現」の評価事例が示されています（84～85ページ）。そこでは児童の作品を例に挙げ，以下のように解説しています。

> ・児童1は，自分たちの住む地域について，そのよさや願い，自分の考えや気持ちなどを表す語句や表現を，すべて正しく書いているので，「知識・技能」において「十分満足できる」状況(a)と判断した。また，自分たちの住む地域について，相手に伝わるように，そのよさや願いなど，自分の考えや気持ちを，単元で学習した語や巻末のWORD LISTを調べて語を選んだり，文字と文字，語と語の間隔に適切なスペースをおいて，適切に書いたりしていることから，「思考・判断・表現」において「十分満足できる」状況(a)と判断した。
> ・児童2は，自分たちの住む地域について，そのよさや願いなど，自分の考えや気持ちを表す語句や表現を一部正しく書いていないので，「知識・技能」において「おおむね満足できる」状況(b)と判断した。また，語と語の間隔を空けないで書くなど，相手によく分かってもらえるようにという観点からは，適切でない部分が見られるので，「思考・判断・表現」においても「おおむね満足できる」状況(b)と判断した。（下線は筆者による）

この記述から，「単語の間を空けて書く」ことは「思考・判断・表現」として評価することだと読み取れます。その理由としては，「相手に伝わるように」「相手によくわかってもらうように」というように，コミュニケーションの目的や場面，状況などに応じて書いているためだと思われます。しかしながら，語と語の間隔を空けるというのは「知識」としての「英語の特徴やきまりに関する事項」に属するものであり，実際のコミュニケーションにおいて語と語の間に間隔をおいて書くことができることとして，「書く技能を身に付けている」と捉え，「技能」に含めるほうが自然な気もします。なぜなら，目的や場面，状況などに応じて，文字と文字の間隔や語と語の間隔を広げたり，狭めたりすることは考えにくいからです。

つまり，これらのことは目的や場面，状況には影響されません。「書くこと」の「思考・判断・表現」の評価として，目的や場面，状況などに応じて，相手にうまく伝わるように既習の語句や表現を選んだり，文の順序を考えたりする様子を評価することは，適切であると思う半面，「単語と単語の間を空けて書く」ことを「思考・判断・表現」で評価するのは難しいように思います。みなさんはどう思いますか。



このほかに「聞くこと」，「話すこと」，「パフォーマンステスト」などに関するQ＆Aを弊社ホームページで近日公開予定です。

実践報告

児童の振り返りをもとにした指導改善 ～ICTを活用して～

沖縄県浦添市立港川小学校教諭（外国語専科） **神村 好志乃**

1. 形成的評価に目を向けて

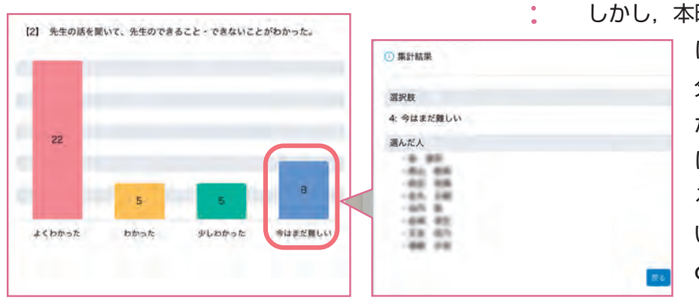
児童一人ひとりの課題に応じた指導の充実を目指し，形成的評価をより効果のあるものにするために，ICT（ロイロノート）の「アンケート機能」を活用して，毎時間の振り返りシートに目標をふまえた評価項目を設定し，児童による自己評価を行っています。集計結果が瞬時に表示されるので，その場で学習状況が把握できます。「どの場面」で「どのような表現」につまずいているのかを把握しやすくなり，学習過程で指導改善や児童への適切なフィードバックが行えるようになりました。

2. 形成的評価の仕方

右ページ上の図は，指導と評価の計画（図1）と振り返りシートの一部（図2）です。図1の評価規準の列に○がついている活動は評価場面を表しています。振り返りシートはロイロノートで配信し，回答集計まで行っています。

ロイロノートには集計結果が棒グラフで表示され，回答項目をクリックすると，その項目をチェックした児童の名前が確認できます。誰がどのような自己評価をしたのか一目瞭然です。

適切な学習と指導の改善のために，教師の評価と児童の自己評価の間にずれが生じないよう，評価の客観性を保つために，振り返りでは「6問中全部正解なら『よくできた』，4･5問なら『できた』」といった，具体的な評価の基準を設定し，児童と共有しました。そうすることで，どの児童が支援を必要としているのか客観的に把握することができるようになりました。



ロイロノートに表示された集計結果

3. 授業改善の実際

5年の“I can [can't] ～.”，“Can you ～?”，“Yes, I can.[No, I can't.]”を用いてできることやできないことを伝え合う単元の実践を紹介します。第1時の振り返りから，can[can't]を聞き取ることはできましたが，意味を「好き」「嫌い」や「楽しい」と捉えている児童が見受けられ，意味理解が不十分であることがわかりました。そこで，第2時では，自己評価が低かった児童の「できること」を授業前に担任にたずねておき，授業始めのSmall Talkで紹介したり，本時の導入場面で前担任のできることの紹介を動画で見せたりして，児童が興味をもって推測しながら表現を聞くことができるようにしました。そして，動画に出てきた表現を用いて児童に質問しながら，can[can't]について理解しているかを確認しました。自分のことや身近な人の内容は，これまでの知っている情報から英語を推測することができ，意味理解につながりやすく，振り返りでは多数の児童が「意味を理解できた」と回答しました。

しかし，本時で導入した“Can you ～?”の表現については「質問はできたけれど，自分のできることを伝えることが難しかった」という記述が多く，言語活動において，「自分のできることを伝えることができた」と答えた児童が少ないことがわかりました。これは，“I can[can't] ～.”の表現を伝えることが不十分なまま，質問を含むやり取りをしたためだと捉えました。

7　指導と評価の計画（7時間）　◎記録に残す評価　○指導改善に生かす評価

時間	◇ねらい　・学習活動	単元の評価規準 知・技	思・判・表	主体的	評価方法
1	◇できるできないの表現がわかる ・Oral introduction: 先生の意外な特技を聞く。 ・単元のゴールを確認する。 ・クイズ形式でできるできないの表現を聞き取る。 ・Teacher's talk: AET とのやり取りを通して、できるできないの表現を聞く。（やりとりをしながら児童へ質問し、表現に慣れ親しませる。）	聞くこと ○			・行動観察 ・ふり返りシート

図1　指導と評価の計画

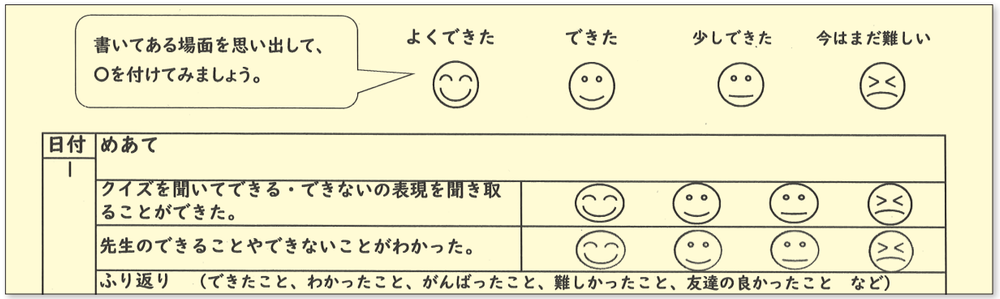


図2　振り返りシートの一部

また，本時の言語活動は場面設定が児童にとって身近に感じられず，児童が何のために何を話したらよいのかがあいまいなまま活動を進めてしまったことに気づき，明確な場面設定が大切であることを改めて痛感しました。そこで，次時の“I can ～.”，“Can you ～?”の学習では，児童が自分のできることを伝えたくなる必然性のある場面設定を行い，伝え合う目的意識をもつことができるように促しました。

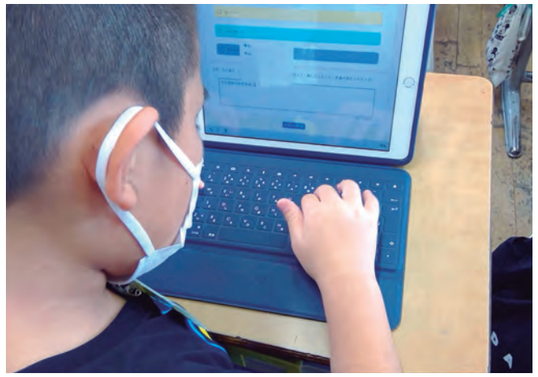
このように，毎時間の児童の振り返りをもとに，各児童のつまずきとその原因を追究し，次時で児童に必要な助言や支援をしたり，児童の実態に合わせて工夫した言語活動を積み重ねたりしながら，つけたい力に向けてPDCAサイクルで指導を行いました。

「努力を要する」状況だった児童が，振り返りに「今日は自分のできることを伝えることができました。やったー」と記述したり，進んで友だちに伝えたり，たずねたりしている様子が見られるようになり，指導と評価の一体化の重要性を実感しています。

4. 実践を通して

評価場面と振り返りの項目を一致させ，評価基準を児童と共有することで，個別の児童の学習状況の把握が的確にでき，学習の過程でより適切なフィードバックができるようになりました。加えて，ICTを活用したことにより，複数の学級を受け持つ専科教員でも，児童一人ひとりの学習状況を，より効率的に，より丁寧に見取ることができるようになりました。児童にとって効果的な活動や授業構成の傾向を分析し，指導改善に生かしています。

実践を通して，的確な児童の実態把握と課題に応じた指導改善を図る意味や大切さを実感しています。今後も形成的評価を生かした授業づくりを行い，児童が英語で伝え合う喜びや楽しさをさらに感じられるような実践を進めていきたいと考えています。



Reading and Writing
Step-by-Step

❶文字指導について考えましょう

宮城教育大学特任教授 **長谷川 アリソン**

子どもたちがつまずきやすいアルファベットの大文字，小文字の学習。今回は，長谷川アリソン先生に10年以上の豊富な実践経験に基づき，その指導のポイントを2つに絞って紹介していただきます。

最初のポイントは，**「計画的な指導によって子どもたちの上達を促す」**ということです。英語圏に住むネイティブの子どもたちでも，スムーズに英文を読んだり，書いたりすることができるようになるまで長い時間をかけて学習をします。当然，日本の子どもたちの英語の読み書きの学習にはより多くの時間が必要です。

それには，教師が年間指導計画の段階から，使用する教材と指導にかける時間をしっかりと決めておき，準備をする必要があります。子どもが文字を四線上に正しく書けるようにするためには，書いたものを教師が細かにチェックする時間も必要ですから，無理のない時間設定で計画を立てることが大切です。

次のポイントは，教師が**「意識的に英語の音や文字に触れる機会を十分に作ること」**です。日本の子どもたちが生活環境の中で自然に英語と触れ合えるチャンスは多くありません。まずは中学年からたくさんの英単語に出合い，文字の形や名前に遊びを通して何度も触れてから，高学年での読み書きの学習が始められるように意識したいものです。このように英語圏に住むネイティブのような環境に近づけながら，工夫を凝らして単語の読み方の手本を示したり，意味を伝えたりしてスモールステップで指導していくことが重要です。

具体的な指導法についてですが，最初のステップは耳からの指導になります。いろいろなバージョンのアルファベットの歌を子どもたちに聞かせることをおすすめします。テンポの速い歌，遅い歌，アルファベットの順番が変わる歌など，子どもたちにはたくさんの歌に出合ってほしいものです。アルファベットカードやアルファベット表を指でさして，文字の音と形を確認しながら，聞いたり，歌ってみたりすることが大切です。この活動では，表を見ることでアルファベットの順番に注目しながら，大文字･小文字の違いに気づくことができます。本ページ下段におすすめのアルファベットソングを5つ紹介していますので，ぜひ参考にしてください。

最後にアルファベットの学習におすすめの活動を2つ紹介します。

❶ペアやグループになって，大文字と小文字がミックスされたカードを分類してアルファベット順に並べ変えるゲーム。

❷大きめのアルファベットの文字カードを子どもたち1人に1枚ずつ配ってからアルファベットの歌を聞かせ，自分の持っている文字が出てきたらそのカードを掲げる活動。

26人以上の学級なら，2つのセットを使うと出番が多くて楽しい活動になります。1回ごとにカードを交換すると，さらにおもしろくなります。

おすすめのアルファベットソング

YouTubeで視聴することができます。

1：ABC Song and MORE Songs for Kids by ELF Learning（ELF Kids Videos）
2：The Alphabet Is So Much Fun（Super Simple Songs）
3：The Alphabet Chant（Super Simple Songs）
4：The Alphabet for Kids（www.walphabet.com）
5：The Backwards Alphabet Song（ABCmouse.com）

小学校英語情報誌
Junior Sunshine Vol.4-1（通巻7号）
非売品

令和3年10月26日印刷　令和3年10月29日発行　編集兼発行人　大熊 隆晴
印刷所　株式会社平河工業社　〒162-0814　東京都新宿区新小川町3-9
発行所　開隆堂出版株式会社　〒113-8608　東京都文京区向丘1-13-1
☎03(5684)6121(営業)，(5684)6118(販売)，(5684)6115(編集) http://www.kairyudo.co.jp/

開隆堂出版株式会社
〒113-8608 東京都文京区向丘 1-13-1 ☎ 03(5684)6111

北海道支社　〒060-0042　札幌市中央区大通西11-4-21　52山京ビル7階　☎ 011(231)0403
東北支社　〒983-0852　仙台市宮城野区榴岡4-3-10　仙台TBビル4階　☎ 022(742)1213
名古屋支社　〒461-0004　名古屋市栄区葵1-15-18　オフィスサンナゴヤ9階　☎ 052(908)5190
大阪支社　〒550-0013　大阪市西区新町2-10-16　☎ 06(6531)5782
九州支社　〒810-0075　福岡市中央区港2-1-5　FYCビル3階　☎ 092(733)0174